

## 「合才の精神」で時代に対応 自走式駐車場の進化をリードする

本誌編集長  
山本 稔



春原 典明

綿半ソリューションズ株式会社 取締役  
コンストラクションカンパニー プレジデント



### 【プロフィール】

春原 典明 (すのはら のりあき)

1965年9月24日生まれ。1988年4月 綿半鋼機株式会社三島支店入社  
1993年10月 関西支店異動 2004年4月関東支店 2011年7月関東支店  
支店長 2016年4月綿半ソリューションズ株式会社(建設系事業会社統合)  
執行役員 事業部長 2022年3月カンパニー制導入で、コンストラクション  
カンパニー取締役 カンパニープレジデントに就任、現在に至る。

趣味：ゴルフ、野球

座右の銘：「率先垂範」。これに伴って、山本五十六の「やってみせ、言っ  
て聞かせて、させてみて、ほめてやらねば、人は動かじ」も好きな言葉

ポリシー：何事も楽しく、どんな時でも前向きに

愛読書：地元の真田家(真田三代：幸隆、昌幸、幸村)に関する書籍

ハマっていること： サバイバルゲーム。童心に戻り、ストレスを発散！

世界が新型コロナウイルスのパンデミックに入ってから、ほぼ3年が経過した。2022年9月、WHOのテドロス事務局長が感染状況について「終わりが視野に入ってきた」と述べたが、2023年に入っても完全な終息を見通すことはまだまだ難しいだろう。加えて、中国のゼロコロナ政策による部品供給の滞り、円安、原油高、鋼材高など、私たちはマイナス要因に囲まれて新年を迎えることになりそうだ。

シビアな情勢は自走式駐車場の業界においても同様ではある。ただ、多様な業態をもち、絶えず新しいことに挑戦するDNAをもつトップメーカーのひとつ、綿半ソリューションズは、こうした逆境をもバネにして、独自の自走式駐車場づくりに邁進してきた。『使いやすい』が、おもてなし』を標榜し、時代に対応し続けてきた同社で駐車場領域を統括するコンストラクションカンパニーのプレジデント・春原典明氏を訪ね、過去～現在～未来を伺った。

収録：2022年11月14日

聞き手：本誌編集長 山本稔

## 400年超の歴史を重ね 多業種展開を継続してきた 原動力は

**山本** 春原さんは「すのはら」とお読みするんですね。どちらか特定の地域で多い苗字なんですか？

**春原** 私は長野県の上田市出身でして、上田、佐久、小諸などの各市町村を総称して、長野県では「東信(とうしん)」と呼ぶのですが、このエリアでは比較的によくある苗字です。特に上田市は多いですね。上田といえば大河ドラマにもなった「真田丸」が有名ですが、春原 惣左衛門(すのはら そうざえもん)という家臣もいたそうです。

**山本** なるほど。上田では歴史ある名前なんですね。

**春原** はい。高校まで上田におりました「すのはら」が一般的だったので、県外に出て名古屋の大学に進んでからは「はるはら」と読むほうが一般的なんだ、ということに気が付きました。ですので、社会人になってから名刺を交換するとき、『はるはら』ではなくて「すのはら」と読むんです』というやりとりが定番になりました。むしろお客様に名前を覚えていただきやすい、有利な苗字だと思うようになりましたね。ちなみに、ゴルフバッグは「さ行」ではなく「は行」のロッカーに入れられがちですが(笑)

**山本** ははは。それは大きくルビをふるとか、何かしら工夫が必要かもしれないですね。さて、ではまず、春原さんの入社経緯から教えていただけますか。

**春原** 私が入社したのは、当時、綿半ソリューションズの前身だった綿半鋼機株式会社でした。綿半グループはもともと

長野県で生まれた企業ですので、将来的には長野県に戻ろうか、という意識もあって綿半に入社することを決めたのです。

**山本** 綿半グループの起源はなんと1598年。和号では慶長3年とお聞きしています。本欄にご登場いただいた企業では、他社の追随を許さない老舗です。

**春原** 綿半は元々は屋号なんですね。織田信長の家臣が長野県の飯田市に落ち着き、武士から農業へ転業して、綿の栽培を始めたことが起源です。当時、農民は苗字をもつことは許されていませんでしたが、その後「半三郎」という方が当主になったあたりから商売が軌道に乗り、「綿屋半三郎」、略して「綿半」という呼び名が定着していったようです。明治期に入ってから、綿から鉄へ商いを交えまして「綿半鋼鐵金物店」となりました。鍋、釘などの小売りと、それらの資材を使った建設業へと拡大していったそうです。ちなみに長野県を中心に、現在もグループ企業が、スーパーやホームセンター、ドラッグストアなど小売業を展開しています。

**山本** 時代の流れに対応しながら業態を増やし、多様な企業グループへ発展してきたわけですね。まさに、御社のポリシーであるとお聞きしている「合才の精神」を象徴しています。

**春原** はい。経営者と社員の隔てなく、社員全員による企業を目指し、力を合わ

## 綿半グループ創業から近代への歴史



綿半グループの開祖は、織田信長の武将の一人。「合」の旗印を掲げていたという。本能寺の変の後、長野県飯田市付近に落ち延び、刀を捨てて綿を扱う商いを開始。明治時代には綿商いから金物商へ事業を転換し、鉄・セメント業へと舵を切ったという。





せ、分かち合い、響き合うのが「合才の精神」であると位置づけています。この考えが軸にあったからこそ、400年以上の歴史を重ねてこられたのだと思います。

## “異国”大阪で磨かれた アグレッシブな姿勢

**山本** では、続いて春原さん個人の歴史をお聞きしていきましょうか。入社後はどんな仕事をされたのですか。

**春原** 当時、静岡県三島の支店に配属されました。三島支店は主に金属

屋根・外装の工事を請け負ってまして、私は主に工事管理を担当しました。まだバブル期が終わるくらいのタイミングでしたので、屋根・外装には、銅板、ステンレス、アルミなど今でいう超高級素材を使うことも多かったですね。また、三島支店がカバーしていたエリアには伊豆半島全域も含まれていて、ゴルフ場のクラブハウス 企業の福利厚生施設、ホテルなど、レジャー、観光関係が主なクライアントでした。

**山本** なるほど。三島は長く勤務されていたのですか。

**春原** 5年ほどでしょうか。その後は大阪でこちらは11年近くおりました。三島同様、工事管理、さらに営業も担当していました。当時は大阪が綿半として最西端の支店でしたので、中国・四国地方、時には九州など西日本を広くカバーしましたね。移動距離も長く、常に忙しかった記憶があります。

**山本** そこまで広いエリアをカバーするとすると、同じ仕事だとしても地方ごとに特色というか、商慣習に違いのようなものがある、切り替えるのが大変な気がします。大阪での日々はいかがでしたか。

**春原** 商売の原点といいますか、アグレッシブな姿勢は学ぶところが多かっ

たですね。ただ、勢いだけではもちろんダメですから、情報収集、裏付けを取ることの大切さも同時に身に着けられたと思います。大阪は最初こそ“異国”に近い感覚があったのですが、仕事は楽しく、暮らしやすい場所でした。今でも時々恋しく思いますね。

## 「stage W」で6層7段の 国土交通大臣認定を初取得

**山本** 大阪の後は東京へ異動されたんですか？

**春原** はい、当初は引き続き工事管理、営業などを務め、自走式駐車場には、2016年に建設系の企業が合併して現在の綿半ソリューションズになってから携わっています。ちなみに合併前は、私がいた綿半鋼機が屋根・内外装、綿半テクノスが鉄鋼と自走式駐車場、そして綿半インテックが緑化などの事業を行っていました。

**山本** ソリューションズとなったのは、グループのシナジーを活用しようとお考えがあったからでしょうか。

**春原** そうです。やはり相乗効果があると感じています。この四谷にある東京本社は建設関係だけでなく小売りのグ

## 研究開発に基づく先進の付加価値



技術センターにおいて新工法の開発や実寸大での検証、壁面緑化に向けた生育試験などを行い、駐車場の新たな価値を追求している。① 駐車場壁面緑化「GREEN PARKING SYSTEM」の重要な構成要素であるグリーンパーキングプランター。② 技術センター実験棟。③④特許取得の雨水貯留コラム。⑤ 岐阜県海津市の技術センター全景。

ループ企業も入っているんですね。フリーアドレス制を導入してしまっていて、スタンディングの隣から、流通とかマーケティングの話などが聞こえてきたりする。まったく領域は違いますが、刺激を受けるのは確かです。

**山本** 自走式駐車場業界に足を踏み入れた際は、どんな感想をもたれましたか。

**春原** ちょうど大型化が進み始めた頃で、スケールの大きな建造物をつくることになったな、というのが第一印象です。マンション、パチンコ店、郊外の大規模商業施設、大規模病院など、10億、20億の案件でしたから。

**山本** 遡って、御社はどのような経緯で駐車場領域に参入されたのでしょうか。

**春原** 最初は私がいた綿半鋼機が自走式駐車場に関わっていて、二段式、載置式から始まり、その後、綿半テクノに移管されていきました。

**山本** 載置式の駐車場ということは、自走式駐車場の黎明期から携わっていらっしゃるということですね。

**春原** はい。日本の自走式駐車場の歴史と共に歩んできたメーカーであると考えています。

**山本** 御社の自走式駐車場といえば連想されるのが「stage W」です。この製品の特徴、強みなどを教えてください。

**春原** 2016年以前から「stage W」は登録商標されていまして。ネーミングの由来は、私は「Watahan」の「W」だとばかり思っていたのですが、別の人からは、駐車場づくりの第一歩となった、1層2段の2段が転じて「W」になったという説も聞きました。いまひとつ真相はクリアではないのですが…。

**山本** つまりは「Wミーニング」かもしれないですね。特徴はどうでしょうか。

**春原** 業界で初めてそれまでの5層6段を超え、6層7段の国土交通大臣認定を取得したことが挙げられます。収容台数が大幅に増え、スペースをより効率的に活用することが可能になりました。また、業界初の「スーパーロングスパン」の採用も訴求できるポイントです。最大17.2mの柱間スパンと、ブレースや中間柱が不要な構造で、開放感の高い駐車場となります。空間が広々としていて、駐車区画のレイアウトの自由度も高いです。

**山本** 17.2mのロングスパンというのは本当にすごいですよね。見晴らしの良さ、津波を受けた際の「受け流し力」も高いのではないのでしょうか。

**山本** 17.2mのロングスパンというのは本当にすごいですよね。見晴らしの良さ、津波を受けた際の「受け流し力」も高いのではないのでしょうか。

**春原** 駐車場壁面緑化「GREEN PARKING SYSTEM」も大きな付加価値のひとつと位置づけていますね。駐車場の転落防止柵にオリジナルの軽量プラ



ンターを設置し、自社栽培の壁面用植物を用いた緑化工法です。弊社の緑化部門が、専門知識と技術を活かし、設計・施工・維持管理まで一貫体制で行います。壁面緑化をすることで、立体駐車場の無機質なイメージを払拭し、緑豊かな街並み、住環境づくりにも寄与します。

**山本** オリジナルのプランターといたしますと何か特徴があるのですか。

**春原** 発泡スチロールの材料であるEPSでつくってしまっていて、保水効果を高めるため、内部に水を貯めるリブもつくりました。特許も取得しています。また、雨水貯留コラムも弊社独自の技術で、特

## 6層7段 自走式駐車場の導入事例



⑥ 17.2mのスーパーロングスパン。外観がシンプルになり、スタイリッシュなイメージに仕上がることも長所だ。⑦⑧ 神奈川県平塚市フラット式926台6層7段大臣認定での初の施工事例。⑨⑩ 愛知県名古屋市フラット式1,864台(2棟)。



許を取得しています。これは駐車場の柱やブレースを利用して雨水を貯める仕組みで、柱やブレースの鉄骨(コラム)内に雨水を貯留し、先端に取り付けた蛇口から雨水を取り出すことができます。通常は清掃用の水まきや植栽の水やりに活用し、災害発生時にはトイレ用水などに充てることができます。なお、こうした技術の開発は、岐阜県海津市にある「技術センター」で行っており、立体駐車場の新たな価値を追求しています。

## 津波避難・防災拠点として 地道に啓発活動を継続

**山本** 災害という言葉が出ましたので、関連して防災対策の取り組みについてもお聞きます。東日本大震災発生から昨年で10年が経過しましたが、復興はまだ道半ばの状態です。また、2022年9月末には、政府の中央防災会議が、北海道～千葉の沿岸108市町村を「津波避難対策特別強化地域」に指定し、防災対策を推進するなど、震災・津波対策はいまなお我が国の大きな課題といえます。これに伴い、自走式駐車場への注目も増すことが期待できますが、受け止め、期待感などを教えていただけますでしょうか。

**春原** ある意味“追い風”として受け

止めています。先にお話した弊社製品「stage W」では、災害対策をふまえて、多様な機能を付加することが可能です。例えば蓄電池を併設し、溜めた電力を携帯電話などの充電に活用する／緩い勾配で幅の広いスロープであるため、高齢者や車椅子利用者でも避難がしやすい／簡易区画シートで車室部分を区画することができ、緊急時に医療行為の場とし手の活用も可能、といった機能です。

**山本** 2017年7月に内閣府から、津波防災対策の一層の推進を図るため、「津波避難ビル等を活用した津波防災対策の推進について」(技術的助言)と「津波避難ビル等に係る事例集」が公表されたことも、自走式駐車場業界にとっては画期的でしたよね。新しい技術的助言によって、鉄骨造(S造)の国土交通大臣認定の自走式立体駐車場を津波避難ビルに指定することが可能になったわけですから。ただ、その一方で津波避難という「単機能」ではないことなどから、自走式駐車場には補助金が付きにくいのも事実。これが枷になって、普及の速度が鈍い側面もありますね。

**春原** そうですね。大臣認定品であることは大きな価値がありますが、半面、認定されているがゆえに、設置しづらいプラスアルファの機能もあります。ともあれ、地道に啓発活動を継続し、普及を

進めていくことが大切ですね。

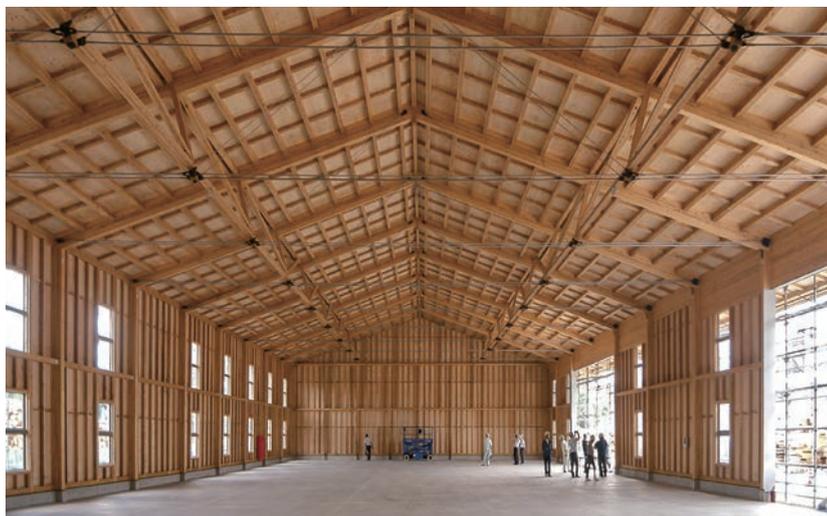
**山本** 工業会の会員企業の目線からすると、大臣認定自走式立体駐車場を扱うことの意義、期待感などはどのように映っていますか。

**春原** 私は自走式駐車場の領域に入ってから、あまり長い時間が経っておりません。それゆえの比較的ニュートラルな見地から申し上げますと、もっと大臣認定ならではの長所を前面に訴求する形でビジネスをしていければ良いのではないかと感じています。安全性、工期の短さなどいくつものメリットはありますが、特に、在来、一般建築に比べると低コストで済む点をアピールしていくべきではないでしょうか。そうすることで会員さんの収益が少しでも上がれば理想的です。ただ、徐々にお客様もある意味賢くなってきて、ある程度価格相場もつかんでいらっしゃるのでは、交渉しづらいケースもあります。

**山本** そうですね。確かに価格勝負ばかりになってしまうと厳しくなるかもしれません。「stage W」は多様な付加価値を付けられる仕様だとして説明いただきましたが、ほかにもエレベーターが付けられる、大型バスが停められるなどの付加価値を備えることで、クオリティで勝負するののひとつの戦略といえますね。

**春原** そのとおりですね。

## 木造中規模建築も展開



一般流通サイズの木材と規格化されたオリジナル金物を組み合わせ、コストを抑えて広い柱スパンの中規模建築事業も展開。駐車場にも応用する日は来るか…?





「2018年1月から始まった『認定品表示板』を表示する制度も有効に活用していきたいですね」などの話題も交えながら、対談は終始和やかに進んだ。

## 「鉄×木」のハイブリッドが次世代の自走式駐車場に!?

**山本** EV、自動運転、あるいは空飛ぶクルマなど、車両の進化に伴って駐車場にも同様の進化が求められています。どのような展開が考えられますか。

**春原** キーワードは、やはり環境配慮、再生可能エネルギーといったSDGsへの対応でしょうか。「stage W」でも蓄電池を併設することは可能ですが、さらに発展して、ソーラーパネルによる発電で共有部分の照明やEV充電器の電力をまかなう、といった手段が考えられます。

**山本** 国土交通省が旗を振っているウォークアブルシティに伴い、FRINGEパーキングの実証実験が各地で行われています。実験のひとつの手法として、駐車場に小型モビリティを配置し、車から

の乗り換え拠点として活用するというのがありますが、それに適した環境づくりを模索しても良いかもしれません。実際、シェア型の電動キックボードやシェアサイクルのポートが併設されている駐車場もありますし。

**春原** そうですね。確かに車を停めるだけでなく、新しい用途にも積極的にチャレンジしていく必要があります。

**山本** 冒頭にお話がありましたが、常に新しいことにチャレンジをし続けてきた綿半グループだけに、自走式駐車場業界のアップデートもけん引いただきたいところですね。

**春原** アップデートにつながるかは分からないのですが、グループが2年ほど前にM&Aで木造住宅メーカーを2社、仲間入りさせました。これまでは鉄、セメントというマテリアルが綿半グループの軸だったのですが、環境配慮の世界

的な潮流、さらに長野県の企業ということで長野県産材を活用しようという狙いもあり、今後「木」も柔軟に採り入れていこうという動きが出ております。グループとして木造住宅のほか、集成材と鉄製のプレースのハイブリッドで耐震性にも配慮した倉庫や店舗などをつくっていく計画です。

**山本** なるほど、それはおもしろい。近年～近未来にかけて、国立競技場しかり、2025年の大阪・関西万博のシンボルになる大屋根(リング)しかりで、木造建築の存在感が増すトレンドが生まれていきますからね。ちなみに、耐火性の問題で駐車場の木質化は難しいでしょうか？

**春原** 実は可能性を追求しようとしてリサーチしたところ、ドイツで木材を採用した自走式駐車場の稼働事例を見つけました。ただ、日本の現在の制度ではまだ難しいですね。

**山本** そうですか。ただ、将来的には外装のみならず木材使用を認可するなど、部分的に認められるケースが出てくるかもしれません。鉄と木のハイブリッドで自走式駐車場が完成したら素晴らしいです。大臣認定の項目のなかに「条件付きの木材使用」などが入ってくると、可能性が広がりそうです。

**春原** そうですね。そうした未来も視野に入れていこうと思います。

**山本** よろしくお願い致します。本日はグループのシナジーを活かした多様な取り組みをご紹介いただき、大変勉強になりました。誠にありがとうございました。 **PP**

聞き手：本誌編集長 山本 稔 (やまもと みのる)

1959年神奈川県横浜市生まれ。1981年東京工芸大学写真工学部卒業。制作会社にて宣伝広告・商業カタログ等の写真制作に携わりながら1994年に独立し、デザイン・印刷・出版を主な事業とする(有)サン・ネットを設立。2010年より本誌編集長

## 過去の対談記事をWEBで公開しています

パーキングプレス 対談 で検索

または <http://www.parkingpress.jp/taidan/> にアクセス

